令和５年度　**学校だより**　７月号

～ひとがすき　まちがすき　いわさきの子～

横浜市立岩崎小学校　　電 話 ３３１－５１２３　　ＦＡＸ ３３１－５３４３

戦国時代の逸話から考える「むごい教育」とは

副校長　佐々木　唯吉

校庭の紫陽花が色鮮やかに梅雨空に映えています。蒸し暑くてじめじめした日が続いていますが、子どもたちは時折差し込む貴重な光を浴びながら、元気に活動しています。６月 19 日（月）にはプール開きが行われ、子どもたちが楽しみにしていた水泳学習が始まりました。１年生が育てているアサガオには小さな蕾ができ始め、どんな色の花が咲くのか楽しみにしています。子どもたちの笑顔と共に、夏を思わせる光景が学校に戻ってきました。梅雨明けが待ち遠しいです。

さて、６月には６年生が日光修学旅行に行ってきました。日光東照宮には江戸幕府を開いた徳川家康が祀られており、ＮＨＫ大河ドラマ「どうする家康」の影響もあって例年以上に参拝客で賑わっていたようです。家康は、小さな豪族の松平家に生まれ、「竹千代」と名付けられました。８歳から 19 歳までの間、駿河国を治めていた今川義元（ドラマでは野村萬斎さんが演じられていました）に人質として預けられていました。義元は、幼い竹千代（家康の幼名）の秀でた才覚を見抜き、「このまま成長していけば、いずれ面倒な相手になるに違いない」と考えるようになります。そこで家来に、「竹千代には『むごい教育』をせよ。」と命じました。義元の考えを知らない家来は言いつけに従い、竹千代を早朝に起こし、駆け足で行動させ、粗食を与え、休憩もほとんど取らせず、昼は水練、剣術、槍術、馬術、夜は学問に励ませる等、大変厳しく教育しました。そのことを知った義元は、「『厳しい教育』が『むごい教育』ではない。」と語気を荒げました。怪訝そうな顔をしている家来に対して、「竹千代には贅沢な食事を与え、朝から晩まで好きなだけ食べさせよ。寝たいと言ったらいつでもいくらでも寝かせてやり、休みたいと言ったら休ませよ。夏は暑くないように、冬は寒くないようにしてやれ。本人の望む通りに、何でも与えてやり、好きなことを好きなだけさせよ。そして、虎児じゃ、竜じゃと褒めちぎるのじゃ。」と言ったそうです。それを聞いた家来は驚き、「それがどうして『むごい教育』になるのでしょうか？」と尋ねました。すると義元は「そのようにすれば、たいていの人間は駄目になる。」と答えたそうです。

（参考文献：山岡荘八著「徳川家康」　※この逸話は、資料・出典により多少異なります。）

戦国時代と現代とは違うとはいえ、生きていく中で、苦しみや試練などから逃れられないことがあります。自分が苦手なことに挑戦したり、困難なことにぶつかったりすることは、その時には辛く耐えがたいことでも、後から振り返ると自分の成長に繋がっていたり、大きな転換期になっていたりするものです。子どもたちは我慢や辛抱、困難を乗り越える経験を通して逞しくしなやかに成長していきます。現代が暖衣飽食で便利な世の中だからこそ、義元の逸話から学ぶべきことがあるように思います。